

新石器化と都市化のはざま

—イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の第2次発掘調査(2023年)—

小高 敬寛 金沢大学国際基幹教育院准教授
 前田 修 筑波大学人文社会系准教授
 三木 健裕 東京大学総合研究博物館特任助教
 早川 裕式 北海道大学地球環境科学研究所准教授
 板橋 悠 筑波大学人文社会系准教授
 ラワ・カリーム・サリフ スレーマニ文化財局局員
 フセイン・ハマ・ガリーブ スレーマニ文化財局局长

Between Neolithization and Urbanization: Excavations at Shakar Tepe, Iraqi Kurdistan, the Second Season (2023)

ODAKA, Takahiro Associate Professor, Institute of Liberal Arts and Science, Kanazawa University
 MAEDA, Osamu Associate Professor, Institute of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
 MIKI, Takehiro Project Research Associate The University Museum, the University of Tokyo
 HAYAKAWA, Yuichi S. Associate Professor, Faculty of Environmental Earth Science, Hokkaido University
 ITAHASHI, Yu Associate Professor, Institute of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
 SALIH, Rawa Karim Staff, Slemani Antiquities and Heritage Directorate
 HAMA GHARIB, Hussein Director, Slemani Antiquities and Heritage Directorate

1. はじめに

後期新石器時代(前7000/6600~5400/5200年頃)、「肥沃な三日月地帯」で新石器化を遂げていた人びとがそれまで荒野に過ぎなかったメソポタミア低地の開発に乗り出し、続く銅石器時代(前5400/5200~3100/3000年頃)には、やがて文明社会が開く都市化の舞台が整えられていった。私たちはそのプロセスを定量的かつ実証的に追跡することを目的として、イラク・クルディスタン地域スレイマニヤ県南東部にて、シャカル・テペ(Shakar Tepe)とシャイフ・マリフ(Shaikh Marif)という二つの先史遺跡を調査してきた。これらの遺跡が立地するシャフリゾール平原は、「肥沃な三日月地帯」の東翼、ザグロス山麓の一角に位置し、ティグリス河の支流ディヤラ川を介して、メソポタミア低地へと通じているため、新石器から都市化への移行を探るうえで恰好のフィールドといえる(図1)。

私たちは2019年にシャカル・テペ遺跡、2022年にシャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘を発掘してきたが、2023年は当初、シャイフ・マリフ遺跡Ⅰ号丘の発掘に着手する予定であった。ところが、8月21日に現地での状況を確認したところ、シャフリゾール平原東部に広がるダム湖の水位が高く、シャイフ・マリフ遺跡は三つ

の遺丘のうちⅠ号丘とⅢ号丘の一部のみ、湖の只中で島状に顔を覗かせている状態であった。一方、シャカル・テペ遺跡はダム湖の南西側から陸路でアクセスすることが可能であったため、今回の調査対象として必然的に後者を選択することとなった。

2. 遺跡

シャカル・テペ遺跡は、北東—南西方向に長い約300m×150mの平面楕円形を呈する遺丘として、古くから知られている。2019年の調査では、この遺丘の北西側裾部の緩斜面に階段状トレンチであるA区(Operation A)を設けて発掘をおこない、表土直下の上部で前5千年紀前葉(ウバイド期)の遺物包含層を、その下から地山に達するまで厚く堆積する前6400~6000年頃(原ハッスーナ~ハッスーナ併行期)の文化層を検出することに成功した。A区の近隣では、これらの時代の遺物の他、歴史時代の遺物と並んで後期銅石器時代(前5千年紀後葉~前4千年紀後葉)の遺物の散布も確認された、また、同時に実施した遺丘周辺の踏査では、北西方に低くて目立たない別の遺丘の存在を推測できたものの、確定するまでには至っていなかった。

今回の発掘開始前におこなった現地確認の際、幸い

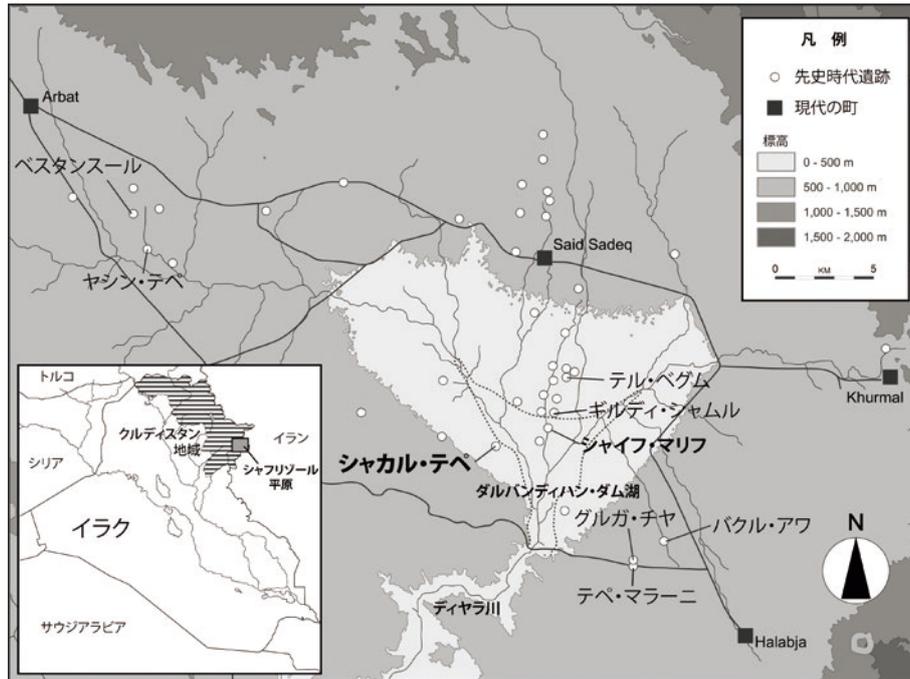


図1 シャフリゾール平原と先史遺跡の位置



図2 シャカル・テペ遺跡のオルソ補正画像と地形

にも遺跡は除草された状態であったため、改めて注意深く踏査を実施した。その結果、既知の遺丘の西方に三つの小規模な遺丘を確認することができた。そこで、既知の大規模な遺丘をシャカル・テペ遺跡Ⅰ号丘とし、他は北西から順にⅡ号丘～Ⅳ号丘と呼ぶこととした(図2)。このうち、Ⅲ号丘とⅣ号丘は時代を比定でき

るような散布遺物に恵まれなかったものの、Ⅱ号丘の地表面ではハラフ後期(前6千年紀半ば～後葉)の所産と思しき多色彩文土器片を確認することができた。

3. 調査成果

今回の発掘調査は2023年8月26日から9月21日



図3 調査区の位置



図4 B区の土器出土状況



図5 B区103号遺構



図6 B区出土ハラフ精製土器

にかけて実施した。調査区として新たにB区(Operation B)とC区(Operation C)の2か所を発掘し、9月23日にB区とC区下半、そして開けたままになっていたA区下半を埋め戻した(図3)。

B区はⅡ号丘の中央頂部に設けた平面4m×4mの調査区であり、この遺丘の層序確認と推定されるハラフ後期文化層の検出を狙いとした。表土層直下でイスラーム時代の埋葬(102号遺構)が見つかったものの、地山まで約2.3mの厚さで堆積していた文化層からは一貫してハラフ後期の土器が主体的に出土したため、遺丘は前5600~5200年頃の間のおそらく比較的短期間のうちに形成されたものと推定できた。文化層のう

ち、上部では10~20cm大の石を大量に含む土坑(104号遺構)の他に目立った遺構を検出できなかったが、下部では遺存状態のよい土器の出土が目立った(図4)。そして、ほぼ地山直上の最下層において柱穴を伴う平面方形のプラスター床(103号遺構)を検出することができた(図5)。

B区から出土したハラフ土器は精製土器(図6)と粗製土器に分類できる。重量で比較すると粗製土器が精製土器の約3倍となるが、口縁部片の点数では精製土器が粗製土器の2倍近くであった。つまり、精製土器は粗製土器に比べて器壁が薄く、器形が小さい傾向にあると推測できる。精製土器片の9割近くは黒色・褐

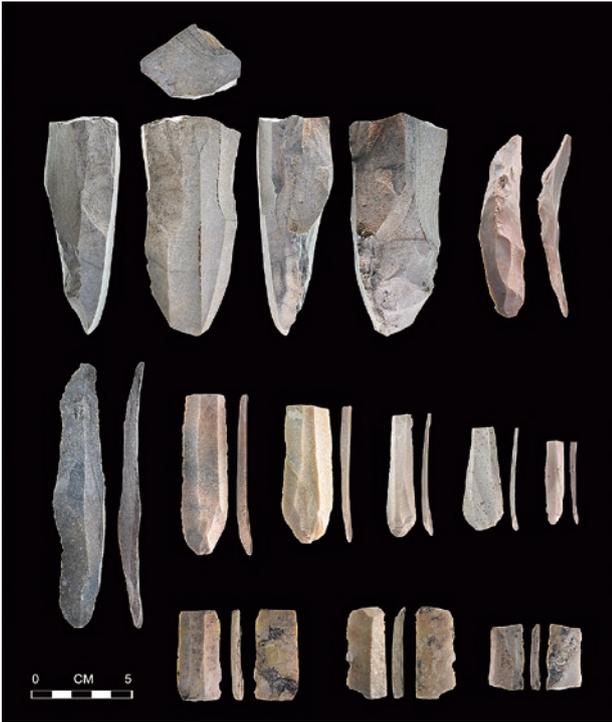


図7 B区出土打製石器

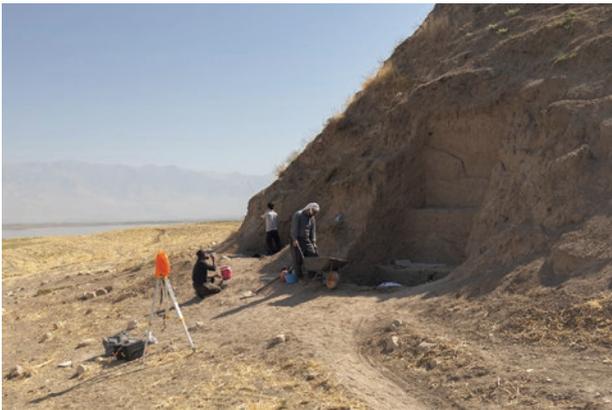


図8 C区調査風景

色・赤色・白色などの彩文で装飾されており、多色彩文の場合も多い。文様はほぼ幾何学文で、しばしばパネル状に区画される。一方、具象文は極端に乏しい。精製土器でありながらスサが混和されている場合も少なくなく、白色彩文の多用、具象文の乏しさと並んで、北メソポタミアの典型的なハラフ後期土器とは異なる特徴をみせている。打製石器には近隣のワディ河床で採取できるチャートが主に使われており、黒曜石は約14%しか存在しなかった。2019年に調査したA区(原ハッスーナ～ハッスーナ併行期)に比べて石器の出土量は少ないが、一方でA区にはみられなかった、在地で押圧剥離による石刃製作をおこなっていた証拠となる石核や石刃が見つかった(図7)。これはおそら



図9 C区4層出土ベヴェルド・リム・ボウル

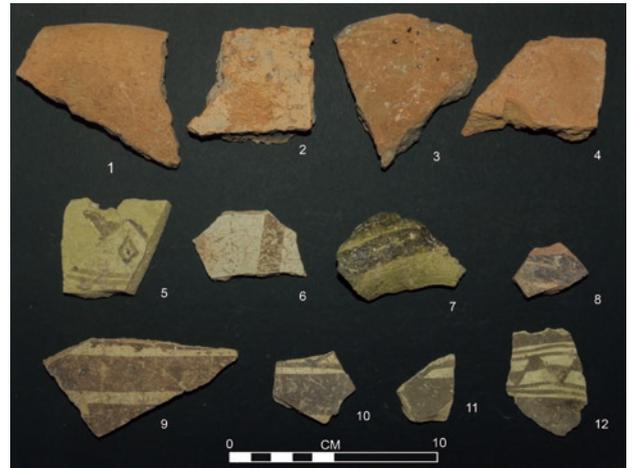


図10 C区5層出土土器

く、石器の組成に鎌刃が多いこととも関係していると思われる。

C区はI号丘の北西部急斜面、A区の南東側に設けた平面3m×3mの階段状トレンチである(図8)。発掘前から露出していた遺丘断面に後期銅石器時代の土器片が認められたため、A区で捉えられた後期新石器時代に続く堆積、特にウバイド期～後期銅石器時代のシーケンスを検出することを狙い、この地点を選定した。発掘区の最も標高の高い地表面から約5.2mの深さまで掘り下げ、文化層を上部から1～7層に区分した。1～5層からは特徴的な大量生産型の器種を含む後期銅石器時代の土器が主体的に出土し(図9)、堆積の厚さは4.5m以上に及んだ。出土土器の特徴から、1～5層はLC2～3期(前4200～3600年頃)の堆積と推測される。5層下部から続く薄い6層にかけては、ウバイド期(前4900～4600年頃)の所産と思しき鈍黄色の器面に黒色彩文を施した土器を包含していた(図10)。その下の7層は途中まで掘り下げるとどまったが、前7千年紀末にあたるハッスーナ併行期の刻文



図11 C区201号遺構

土器の出土が目立った。近くのA区の状態から、下方にはまだ分厚い後期新石器時代の文化層が眠っているものと考えられる。

C区は平面規模が限られていたため出土遺構に乏しかったが、それでも2層で検出された201号遺構は特筆される(図11)。この遺構はLC2期(前4200~3900年頃)以降に比定される無文の甕を用いた土器棺墓であり、甕の内部から嬰兒ないし乳児のものと思しき人骨が出土した。出土遺物には上述のような土器の他、後期銅石器時代層から出土した大型のビーズあるいは漁網錘のような土製品が目を惹く(図12)。打製石器は出土数が限られているものの、後期銅石器時代における組成はB区の場合と大きな差異が認められなかった。

4. まとめと展望

2023年の発掘調査では、ハラフ後期や後期銅石器時代の豊富な考古資料を収集することができた。確たる年代は現在進めている理化学的測定の結果を待たねば明言できないが、おそらく前6千年紀半ば~後葉と前5千年紀~前4千年紀前葉の範囲をカバーするものと思われる。シャフリゾール平原ではいくつかの遺跡で同時代の調査が散発的ながらおこなわれてきたが、



図12 C区出土土製品

原ハッサーナ~ハッサーナ併行期に当たる前6400~6000年頃の資料を含めて、単一の遺跡からこれほど長期にわたる先史時代後葉のシークエンスを明らかにした例はない。こうした考古学的証拠は、私たちの目的である新石器化から都市化への移行プロセスの定点的かつ実証的な追跡に、大きく寄与してくれることだろう。

強い地域性と時系列的な変化をみせている出土遺物は、そのプロセスのメカニズムを理解するうえで重要な研究資料となる。今後、これらの詳細な分析によって、物質文化の内実を明らかにし、広範な時空間的枠組みの中に正しく位置づけ、他地域との通時的な関係を考察していきたい。

そして、層位学的情報を伴う資料をより充実させるべく、シャイフ・マリフ遺跡I号丘の発掘に臨むとともに、シャカル・テペ遺跡の調査も継続し、特に今回達成できなかった確たるウバイド文化層の検出に努めていく所存である。

なお本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金・新学術領域研究(課題番号:JP21H00003)、基盤研究(B)(課題番号:JP23H00692、JP21H00590)などにより実施した。

参考文献

- Odaka, T. 2024 Tell Begum, Shaikh Marif and Shakar Tepe: The Late Neolithic Pottery in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan. in T. Richter and H. Darabi (eds.), *The Epipalaeolithic and Neolithic in the Eastern Fertile Crescent: Revisiting the Hilly Flanks*, 261-278. Routledge, Abingdon and New York.
- Odaka, T., O. Maeda, T. Miki, Y. S. Hayakawa, P. Yewer and H. Hama Gharib 2023a Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the First Season (2022). *Ancient Civilizations and Cultural Resources* 1: 1-22.
- Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishia-ki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2020 Late Neolithic in the

- Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019. *Neo-Lithics* 2020: 53-57.
- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2023b Late Prehistoric Investigations at Shakar Tepe, the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: Preliminary Results of the First Season (2019). In N. Marchetti et al. eds., *Proceedings of the 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, vol. 2: Field Reports, Islamic Archaeology*, 415-428. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden:
 - ・ Odaka, T., O. Nieuwenhuys and S. Mühl 2019 From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain. *Paléorient* 45(2): 67-83.
 - ・ 小高敬寛・早川裕式・O. ニウウェンハウゼ・S. ミュール 2018 「新石器化と都市化のはざま—イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の予備調査(2012~2017年)—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』12-16頁 日本西アジア考古学会。
 - ・ 小高敬寛・前田 修・下釜和也・早川裕式・西秋良宏・N.A. ムハンマド・K. ラシード 2020 「新石器化と都市化のはざま—イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の第1次発掘調査(2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』15-20頁 日本西アジア考古学会。
 - ・ 小高敬寛・前田 修・下釜和也・早川裕式・西秋良宏・N.A. ムハンマド・K. ラシード 2021 「新石器化と都市化のはざま—イラク・クルディスタン、シャフリゾール平原の先史遺跡調査(2019~20年)—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』14-19頁 日本西アジア考古学会。
 - ・ 小高敬寛・前田 修・三木健裕・早川裕式・西秋良宏・P. イェウエル・H. ハマ・ガリーブ 2023 「新石器化と都市化のはざま—イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の第一次発掘調査(2022年)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』36-41頁 日本西アジア考古学会。